第１回北陸圏広域地方計画懇談会議事概要

１．日時
　　平成１９年１１月２日（金）１３：３０～１６：００

２．場所
　　ボルファートとやま

３．出席委員（敬称略）
　　西頭座長、浅野委員、犬島委員、猪爪委員、潮田委員、小田委員、川勝委員、酒井委員
　　祖田委員、高山委員、長尾委員、中村委員、柳井委員、吉田委員　　（計１４名）

４．議事（概要）
（１）開会
（２）挨拶
　　岡田北陸地方整備局副局長
（３）委員紹介
（４）座長挨拶
（５）議事
　１）北陸圏広域地方計画懇談会について
　　事務局から資料１について説明
　２）北陸圏広域地方計画の策定について
　　事務局から資料２、３について説明
　３）意見交換
（５）その他
　　懇談会は中間とりまとめ時と計画原案とりまとめ時に開催予定

５．主な発言内容
・広域地方計画は“誰が”、“いつ頃まで”にやるのか、をはっきりさせる必要があるのではないか。
・国土形成計画法では８つの基本分野が示されている。計画策定に当たっては、それら８つの分野に対する基本認識を整理した上で、それを踏まえて戦略を展開する流れがある方が計画として分かり易い。また、事業実施主体者である国や県、市町村の役割を明確に記載する必要がある。
・住民アンケート調査の中に居住者の満足について記載されているが、満足の割合が８割程度となっている。通常、基礎自治体実施のアンケート調査で満足とする割合が９割を超えていることを考えると、不満足とする割合が高いのではないか。他圏域と比較するなど分析を要する。
・人口減少とともに高齢化の進行も暮らしに関しては重要なポイントである。そういう意味では、「子育て」が重視して触れられているように、「高齢者にやさしい」、「バリアフリー」などのキーワードを戦略の中に入れる必要があるのではないか。今後外国人を迎えいれていくことも考慮すれば、観光施設、文化財なども含めてバリアフリーは重要なポイントである。
・全国計画と広域地方計画の関係の中で、広域地方計画が各地方の独自性のある計画を記載するものであるとするならば、日本海国土軸のような横のつながりや相互連携については、全国計画の方でフォローして欲しい。とりわけ、全国計画では大都市圏と地方圏の連携が強く意識されているように感じるので、日本海国土軸のフォローをもう少し強調してほしい。
・民間設備投資について、北陸は、前回調査で高い水準であり、最新の調査でもそれが維持されていることから、民間設備投資が好調であることに変わりはないが、北陸圏の産業は楽観できるものではないというニュアンスを入れて欲しい。
・国内に残る企業を見ると、付加価値を高めることに成功したものが残っており、そういう意味では、研究型産業の立地が求められるとともに、付加価値向上に向けたマーケティングも重要な取組となる。
・北陸圏の今後の方向性を考えるに際しては、東海道メガロポリスに対して“ものづくり”の観点や自然の観点からどのように相互補完していくのか、についても検討していく必要がある。
・計画に記載される事業のスピード感への懸念がある。東海北陸自動車道は40年前に構想されてから、ようやく完成に近づいており、北陸新幹線に至っては、同じ頃に構想されながら、未だ完

成まで数年を要する。事業に関してはその実現性をよく考えてほしい。
・北陸圏の特徴は、小さいながらもきらりと光る優れた個性を持っていること、中小都市と農村とがうまく共存していること、今年実施された全国共通学力テストでも示されたが北陸３県の学力は極めて高いこと、安定した地域社会が維持されていることなどである。
・個性ある計画を明示する広域地方計画に対して全国計画では、基本的、広域的な基盤施設を示すものと理解していたが、全国計画の素案を見ると、どうもそのような施設について明示されていない。広域の基盤施設について、どこかで記載すべきではないか。
・北陸圏広域地方計画では、“環日本海諸国”が随所に記載されているようだが、昨今のアジアの経済発展をみると、中国でも東北地方ではなく、南側の経済発展が進んでいる。現状を前提とした計画ならば、環日本海諸国を対象としても良いかもしれないが、10年後を見据えるならば、環日本海諸国に東アジアを併記して記載すべき。他圏域に遠慮する必要はなく、北陸は独自の世界的な展開をすべきと思う。
・全国的な人口動態を見ると、地方で育てた子どもが東京に働きに出るが、その東京では出生率が極めて低く、しかも団塊世代が高齢世代に入ってくる中で、今後より一層高齢化が進むと考えられる。そのような人口動態も捉え、将来の“中央（東京）”と“地方”の関係を今一度見極める必要がある。
・北陸圏を取り巻く環境をみると、東アジアなどの経済発展の進む中で、日本海の位置づけが高まっており、日本海側と太平洋側が一体となって連携していくことが必要である。
・北陸圏にとっては、中部圏の力をどのように活かしていくのか、が重要である。例えば、愛知県とか浜松などの国内有数のものづくり拠点で製造された製品をアジア向けに輸出する際に、北陸３県の港湾から出す、３県の港湾が連携して輸出するような物流拠点となっていくことなどを考えなければいけない。
・北陸３県や北東北３県は、全国共通学力テストで極めて学力レベルが高いことが示された。学力レベルの高い若者が地元に残るようにしてほしい。そういう意味では、優秀な高校生がいい大学に行こうと東大、京大を目指すのではなく、北陸の大学の連携によって優秀な高校生が地元の大学に行くことを考えるようにして欲しい。
・地方は東京を見る時代ではない。欧米のキャッチアップからアジアに対して「追われる日本」をどのように作っていくかの視点が重要。
・北陸圏の計画で安全・安心がトップに来ることは北陸圏の美しい環境を守る上からも重要であり、トップにおくことに賛成である。安全・安心な暮らしがあり、環境も美しい、というのが日本の目指すべき国の形であり、その地域の代表が立山や白山を背景にした北陸地域だと考える。そのような安全・安心で美しい環境を守る中で培われた科学と芸術が地域に根付いており、匠の技術と先端技術との融合によって北陸圏は独自の発展をしていくのであり、東アジアの宝石となるのではないか。
・北陸独自の美意識を入れると、心が美しい、技術が美しい、環境も美しい、芸術・製品も美しい、水もきれいだということで北陸の良さが出せるのではないか。
・北陸は元来人口が他圏域に比べ相対的に小さく大企業が立地しなかったため、自分たちで産業を育てるしかなく、地域の自然環境資源を生かした特色ある産業が育成された。また、人口が少なくマーケットが小さかったために、富山の売薬のように外に向かって売りにいく、情報発信するということで、現在の情報産業につながっているのではないか。
・そう考えると環日本海をきちんと定義する必要があり、現在のアジア進出では低賃金労働力利用型の産業が多い北陸では独自の対外政策を持たないといけない。北陸地域国際物流戦略チームでは、インランドデポのような独自の取組を行っている。
・また、マーケットはどこにおくのか、北陸の持つ要素技術で絞り込むとしたら何にするのか、などターゲットを絞り込むべきである。その際、要素技術を捉えるにも“繊維産業”を従来のような製糸と捉えるのではなく、最先端のマテリアル科学産業として捉えるなど、地域の産業をつぶさに把握する必要がある。
・ジャストインタイムが要請される中で、“ものづくり”と“物流”をリンクして地域戦略の中に埋め込んで欲しい。
・能登半島などは、過疎が進行しているが、民間企業経営者からみると経営改革として捉えられる市町村合併が終り、産業展開を考えていかなければならない。能登半島に昨今よく聞かれるＩＴなどの基幹産業はなく、あるのは食料供給基地となる農業や漁業であり、さらに今後の発展のためには、それに観光を加えた地域産業振興を進めていくことが必要である。
・また、海外からの観光客も無視できないものであり、能登空港にチャーター便を使って台湾などから年間２万人の人々が観光で北陸を訪れている。その目的は、日本の畳など日本の文化を求

めて来ているのである。北陸でよく言われる一周遅れのトップランナーではないが、残った“日本らしいよさ”をコアコンピタンスとして生かして行けばよい。

・観光は、観光客の来訪によって、観光客に供する食材の提供やエネルギー供給など、地域の産業に少なからず波及していく。そのような観光を産業として見据えることを中部、北陸として捉えていく必要がある。
・今後は産学協働が重要であり、教育の過程で大学と企業家が連携して実践教育を展開していくことが必要である。
・エネルギー面で、環日本海諸国で考えると、北東アジアというとサハリンⅡのガス供給のパイプラインやウラジオストクからの石油供給や中国の北東三省などの東北アジアが重要で、その観点からも北陸地域は重要。一方、現実には中国の企業集積は華南地方で進んでいることから、東アジアと北東アジアの両方を計画の中に記載していく必要があり、どちらも欠かすことができない。
・北陸圏の特徴を生かして広域観光ルートを形成していくことが必要である。キーワードは、伝統の“こころ”と“かたち”である。また、“雪”は弱みではなく、特徴として生かしていくべきであり、地球温暖化の中で益々“雪”は大切な資源となってくる。
・北陸から“雪”は是非発信していくことが必要である。雪に暗いイメージをもたらすのは、冬期の交通途絶などがあるからで、このような対策は今後とも北陸においては重要である。
・地域格差が指摘される中で、それを克服していくためには、“この地域でなければできない”という発想を持たなければならない。
・撤退も戦略的な撤退の発想をもってほしい。具体的に厳しい自然に対して限界集落などで撤退していく際に何をやるかだが、撤退するだけでなく、戦略的に生態系のコリドーを作るといった発想を持つとよい。農業を辞める人の多くは、鳥獣被害によりあきらめる人が多く、生態系のバランス回復は欠かせない。
・北陸３県は、小中高等学校までは、トップレベルであるが、地元企業にハイレベルな教育を受けた人材が来ない。確かに地域に先端産業があるが、土地、人、水を使う産業しかなく、研究機関がない。北陸には、研究者などのハイレベルな教育を受けた人々に最良の暮らしやすい良好な環境があるのだから、今後はどうやってハイレベルな教育を受けた人材に来てもらうか、を考える必要がある。
・教育課程の中での重要な要素として、インダストリーインターンシップやプロジェクトマネジメントなどがあり、今後優秀な学生を集めていくためには、インダストリアルストラクチャーなど学生ニーズに合ったプログラムを作っていく必要がある。
・北陸は住むにはいい場所であるが、できれば国際空港が近くにあってほしい。小松空港などが国際ハブ空港化してくれるといいと思う。留学生にも、国際空港があると望ましく、既に北陸先端科学技術大学院大学にも200人近い留学生がおり、留学生にも評判がよい。かれらは“きれいな地域で、安全で、人々もやさしい”と非常に喜んでいる。
・中学生が読んでも分かるように問題を絞って分かりやすい計画としてほしい。また、総花的でなく、いくべき方向が明確にわかるものを示してほしい。

（速報のため、事後修正の可能性があります。）